

トータルパッケージを活用した関係機関の連携のあり方について

○ 刎田文記（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

岡本ルナ・小池磨美・仲村信一郎・岩崎容子・清野絵・三宅淑子・加賀信寛・

望月葉子・小泉哲雄（障害者職業総合センター障害者支援部門）

1 はじめに

障害者職業総合センター障害者支援部門では、障害者に対する職業リハビリテーション技法の開発を目的として、「職場適応促進のためのトータルパッケージ（以下「TP」という。）」の開発・試行を行い、様々な関係機関でTPが有効に活用可能であることを明らかにしてきた。本稿では、さらにTPが関係機関の連携を促進するツールとなりうることを、研究協力実施機関等での試行状況から検討し報告する。

障害者職業総合センターでは、障害者に対する評価・支援技法として事務・OA・実務作業からなるワークサンプル幕張版（以下「MWS」という。）ならびに情報の整理方法の獲得を目的としたM-メモリーノート等の開発を行った。また、これらの開発物を活用する中で、補完方法やストレス・疲労への対処行動の必要性と、その確立のための効果的な支援方法として「職場適応促進のためのTP」を提唱している。これらの知見から、多様な障害種別への適用可能性が示唆されており、本研究では現在も様々な機関でTPの適用可能性について試行・検討を行っている。

そこで今回は、多様な機関におけるTPの活用状況について整理するとともに、TPを活用した関係機関の連携のあり方について検討する。

2 多様な機関におけるTPの活用事例

本研究では、各種関係機関の研究協力を得て、TPやそのツール群を試行して頂き、様々な活用事例について情報収集を行っている。以下に、各ツール毎の活用事例について示した。

（1）M-メモリーノートの活用事例

高次脳機能障害者に対しリハビリテーションを行っているAリハビリテーションセンターでは、M-メモリーノートを、入所者のリハビリテーションの一環として全面的に導入している。早期にM-メモリーノートを導入するため、個々の対象

者の状況に応じて、使用する様式の改変等を行う等、対象者に応じた活用方法を工夫している。

高次脳機能障害者を中心に支援を行っているB福祉施設では、M-メモリーノートを全ての通所者に導入している。導入に際しては、まず意欲的な数名に集中訓練を実施・導入し、他の通所者の関心や意欲を高め、現在では全ての通所者が活用している。この施設では、M-メモリーノートを活用することで、支援者間で支援の統一が図れ、一貫性のある指導が可能となったこと、通所者が自らの課題をM-メモリーノートで自分で確認し報告や改善に努力するようになったこと等により、施設内の支援がスムーズに行われるようになったと報告されている。

また、対象者によっては、家庭や他の支援機関との連絡にM-メモリーノートを活用することで、家族や他の機関の支援者との間で、対象者に対する支援の方法等についての情報共有が図られるようになったと報告されている。

さらに、C養護学校では、M-メモリーノートを体重や食生活の管理に活用するなど、健康管理の支援ツールとして活用し始めている。

（2）MWSの活用事例

現在複数の養護学校が、校内実習や教科学習、自律活動の授業等で、知的障害・発達障害等のある方に対しMWSを中心に活用している。活用しているMWSは、実務作業に限られず、OA作業や事務作業についても導入されている。いずれの養護学校においても、通常の授業とは異なり、将来の職業生活を意識した取り組みを行っているため、生徒の意欲は高く積極的であることが報告されている。

また、これらの作業を在学中に行った生徒の中には、卒業後に生活の安定を図り、継続的に職業リハビリテーションを指向するためにMWSを活用している事例も見られている。

高次脳機能障害者を中心に治療や医療リハを行

っている D リハビリテーション病院（以下「D 病院」という。）は、入院・外来患者を対象に MWS を中心として活用している。まず MWS の OA 作業が D 病院職能課・OA 事務訓練コースの作業の一部として導入された。続いて簡易版・訓練版ともに、事務課題 3 種（数値チェック、物品請求書作成、作業日報集計）、実務課題 2 種（ピッキング作業、プラグタッパ組立）が導入された。B 病院では、① MWS 簡易版で基礎的能力チェックを行う、② MWS 訓練版で負荷をかけた訓練を行う、③従来から D 病院で活用している作業へ移行する、である。特に、①と②の作業結果は、作業場面のフィードバックだけではなく、その後の相談や支援に効果的に活用されている。

知的障害・発達障害者を主な対象とした E 作業所では、定期的に行われる入所希望者への作業体験実習で MWS を活用している。この中で、プラグタッパ組立やナブキン折りの一部と数値入力、課題の仕様を変えることなく実施しているが、実務課題のピッキング作業では、指示物品の数を減らすなど障害の個別性に対処するため一部の仕様を変更し活用している。この試行では、MWS の実施により、対象者がより実際の職業に近い作業を体験できただけでなく、各々の対象者の障害特徴がより明らかになったと報告されている。

（3）幕張ストレス・疲労アセスメントシート（以下「MSFAS」という。）の活用事例

精神障害者の支援を行っている F 生活支援センターでは、施設利用者 7 名に対して TP を用い、ストレス・疲労への対処行動をセルフマネジメント・スキルとして構築するための支援を行った。試行を行った 4 日間の中で、WCST、M-メモ

リーノート集中訓練、MSFAS の作成、MWS 簡易版・訓練版を実施するカリキュラムを実施し、休憩を取得しやすい環境を整え、疲労やストレスに対する適切なセルフマネジメントが行えるよう、段階的な支援を行った。この結果、個人により実施した MWS の課題やレベルに違いはあるものの、ほぼ 100%の正答率で作業結果を出すことができ、かつ、7 名ともに作業能力の維持のために休憩が有効かつ必要であることを理解した。また、7 名全員が半日間の作業と休憩を計画し、ほぼ、その計画に沿って行動できるようになった。

この取り組みの後、C 施設では 7 名や新たに施設を利用し始めた対象者に対して MSFAS を活用した継続的な相談・支援を続けている。

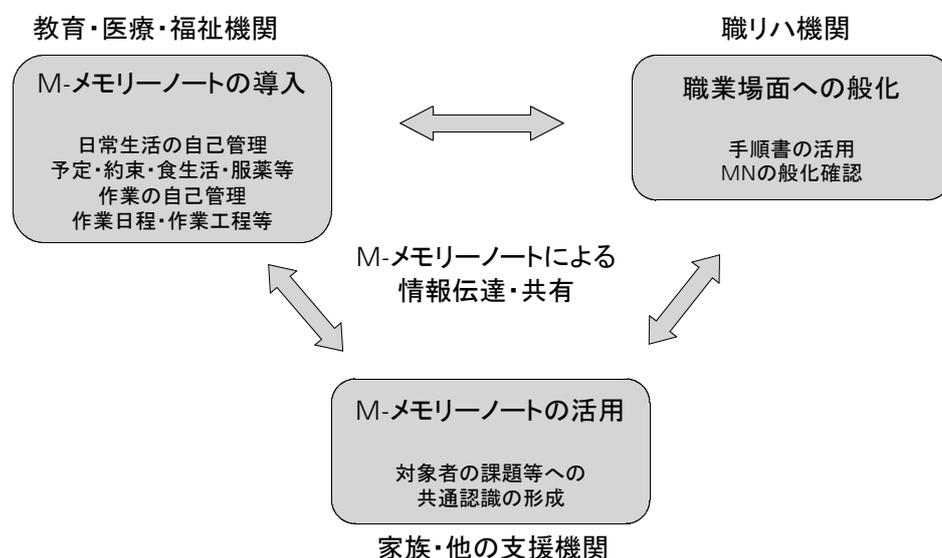
3 TP を活用した関係機関の連携のあり方

2 で見たように、TP に含まれるツール群は、様々な機関でそれぞれの目的に応じて活用され始めている。これらの機関の支援目標の 1 つは、就職への支援であり、TP の活用の実態は、教育や医療、福祉機関の現場で職業リハビリテーションがスタートできることを示している。

そこで、本節では、TP を活用し職業リハビリテーションをスタートしたこれらの機関と、既存の職業リハビリテーション機関との有機的な連携について、TP のツール別に検討する。

（1）M-メモリーノートの活用による連携

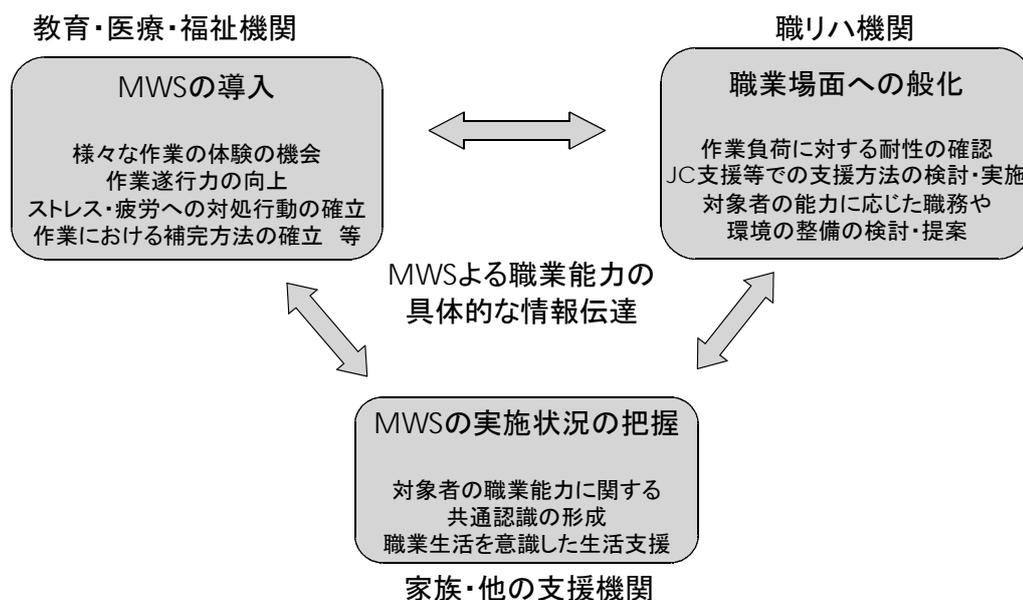
M-メモリーノートは、日常生活や職業生活で必要な情報を整理し、有効に活用できるように支援するためのシステム手帳型のツールである。これらのツールは既に、福祉施設や医療機関等の職業の前段階にある障害者への導入実績がある。こ



これらの機関では、M-メモリーノートを導入し、日常生活面や作業場面での自己管理を支援するだけでなく、家族や他の支援機関との情報共有にも活用し始めている。M-メモリーノートを用いた情報共有は、障害者自身がその情報の運び手となっており、情報共有の過程が障害者本人の了解事項となっているため、複数の機関や支援者が共通のスタンスで支援を行えるようになることが重要なポイントであろう。

今後、このような M-メモリーノートを活用した情報共有による連携が、既存の職リハ機関を含むようになると、より職業生活に近い場面へと M-メモリーノートの活用を般化させることとなる。この時、職リハ機関には、職場での自立的行動を支えるだけでなく、職場と家庭、様々な支援機関を結ぶツールとして機能するよう支援することが期待される。

(2) MWS の活用による連携



MWS は多くの関係機関で、訓練課題として導入され効果的な活用が図られ始めている。これらの機関で MWS を導入することにより、いわゆる職業前の段階の支援が、教育・福祉・医療の中に取り入れられ、より早期に職業を意識した取り組みが実現可能であることを示している。また、これらの試行では、対象者が抱える職業上の課題を具体的に捉えることにも役立てられている。

このように様々な機関が MWS を活用し職業生活を意識した支援を行うことで、対象者は継続的かつ段階的に、具体的な目標を持って支援を受け

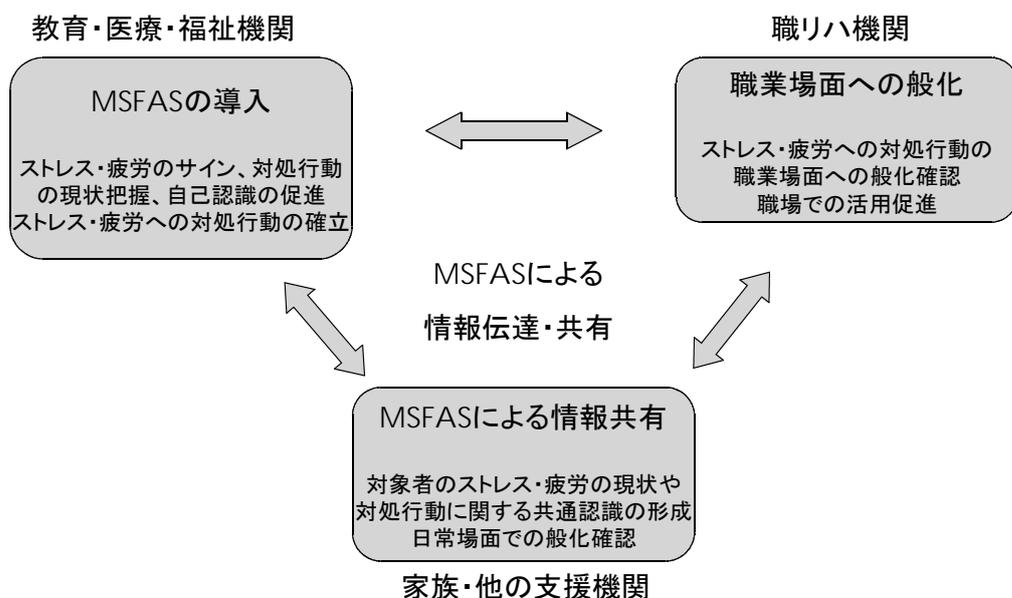
ることが可能となる。例えば、医療機関で一定の作業遂行能力と補完方法を身につけた後、職リハ機関で職場を意識して負荷をかけて MWS を行ったり、既に身につけた補完方法等の般化可能性を把握する等の段階を設定できる。

一方で、職場復帰の支援などでは、対象者の障害状況に適した職務内容を、事業所と具体的に検討する際に、MWS の実施結果が役立てられている。このことから、職リハ機関で支援を行う際に、関係機関から MWS を活用した支援の状況が伝達されれば、新たな作業を学習する場合の対象者の特徴を把握することができ、JC 支援等での具体的な支援方法の検討に役立つ。

さらに、MWS の実施状況を家族や他の支援機関に伝達したり、家庭等の場面で実施できる MWS を活用することで、対象者の職業能力についての共通認識を図ることができ、職業生活を指向しつつ現状のニーズに応じた生活支援を検討したり行うことに役立つと考えられる。

(3) MSFAS の活用による連携

MSFAS は、ストレスや疲労に関連する様々な要因やそれらへの対処行動の現状を整理するための様式群である。MSFAS を活用した関係機関での試行の中では、職業前の支援段階にいる対象者に対しても、ストレス・疲労の現状を整理していくことが、自分自身の障害状況を認識や、対処行動の必要性の確認に役立つことが示唆されている。TP ではこれらの情報をもとに、ストレス・



疲労への望ましい対処行動を確立し、セルフマネジメントスキルの向上を図るよう支援していくが、関係機関が連携することで、これらの成果が、他の関係機関や職リハ機関の利用時に般化できるのかを確認することができる。

特に、職リハ機関では、ストレスや疲労に適切に対処し、自己の作業能力を維持できるセルフマネジメントスキルを実際の職場でも発揮できるよう支援することで、対象者の職場での自律的行動を促進すると共に、職場でナチュラルサポートの確立にも役立つと考えられる。

4 まとめ

TPのツール群は様々な機関で活用されており、導入の方法や効果についても報告が集まり始めている。これらの機関では、職業リハビリテーションを志向しており、今後、地域障害者職業センターをはじめとした職リハ機関と連携する可能性が高い。職業的な自立を1つの目標に、共通のツールを用いて連携して支援を展開する機会が、間近に迫っているように感じられる。

今後は、多くの対象者に多くの機関が職リハサービスを提供するようになるだろう。そのような時代に、系統的な職リハツールとして、TPが活用され、有機的な連携が構築されるよう研究を進めることが必要なのではないだろうか。

参考文献

1)障害者職業総合センター(2004). 調査研究報告書 No57 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)
 2)障害者職業総合センター(2004). 調査研究報告書 No64 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する

る総合的研究(活用編)
 3)木村彰孝他(2005). 養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望—特別支援教育における一人一人の教育的ニーズに応じた対応を目指して— 第13回職リハ研究発表会発表論文集 208-211
 4)泉忠彦他(2005). 高次脳機能障害を持つ方への支援—トータルパッケージの実践を通して— 第13回職リハ研究発表会発表論文集 212-213
 5)伊藤豊他(2005). 高次脳機能障害を持つ方への支援—トータルパッケージの実践を通して— その②— 第13回職リハ研究発表会発表論文集 276-279
 6)剣田文記他(2005). 精神障害者に対するトータルパッケージの活用 第13回職リハ研究発表会発表論文集 204-205
 7)佐藤修子他(2005). 精神障害者社会復帰施設での就労支援におけるトータルパッケージの活用と展望—対処行動獲得にむけて— 第13回職リハ研究発表会発表論文集 206-207
 8)戸田ルナ他(2005). 家族支援に関するニーズ調査—地域・広域障害者職業センターを対象とした調査と家族会等へのヒアリングから— 第13回職リハ研究発表会発表論文集 272-275
 9)位上典子他(2005). 地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について 第13回職リハ研究発表会発表論文集 112-115
 10)池谷祥子他(2006). 障害者小規模授産施設 脳外傷(高次脳機能障害) 工房「笑い太鼓」における就労支援への移行を目指した取り組みについて— M-メモリーノートと M-ワークサンプルの活用について— 第14回職リハ研究発表会発表論文集
 11)木村彰孝他(2006). 養護学校におけるトータル養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望(2)—教育現場における活用可能性を探る— 第34回職業リハビリテーション学会発表論文集 102-103
 12)木村彰孝他(2006). 養護学校におけるトータル養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望(3)—ホームワーク版を含めた活用の実際— 第14回職リハ研究発表会発表論文集
 13)石原まほろ他(2006). 地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用 第14回職リハ研究発表会発表論文集
 14)小池磨美(2006). 精神障害者の就労支援におけるトータルパッケージの活用について 第14回職リハ研究発表会発表論文集
 15)戸田ルナ他(2005). 多様な機関におけるトータルパッケージの活用 第34回職業リハビリテーション学会発表論文集 .94-95.

精神障害者の就労支援におけるトータルパッケージの活用について

○小池 磨美（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

須田文記・岡本ルナ・仲村信一郎・岩崎容子・清野絵・三宅淑子・

加賀信寛・望月葉子・小泉哲雄（障害者職業総合センター障害者支援部門）

1 背景と目的

筆者らは、障害者職業総合センター（以下「当センター」という。）で開発した「職場適応促進のためのトータルパッケージ（以下「トータルパッケージ」という。）」を、精神障害者等を対象とした「ストレスや疲労の捉え方や対処行動の確立」¹⁾のための支援方法として展開してきている。

また、社会的には自立支援法の施行に伴い、精神障害者を対象とする社会福祉施設であって就労支援を実施していなかった施設においても新たに「就労移行支援」に取り組む状況が生まれてきている。新たに就労支援を実施するにあたっては、精神障害者の就労支援についての法律、制度、機関の利用方法など就職活動に必要な具体的な情報の収集とその提供方法、そして就労に向けた障害の受容、バランスの取れた職業意識の醸成、セルフマネジメントスキル獲得のための支援方法についてのノウハウが求められる。

このような状況を踏まえ、トータルパッケージを用いた就労支援のモデルの構築を目的として、精神障害者を対象とする社会福祉施設で行った試行について報告したい。

2 方法

(1) 対象施設

同一法人において、精神障害者のための生活支援センター（3所）、小規模作業所（5所）授産施設（小規模含む2所）などを運営しており、利用（登録）者数は200名程度。

(2) 対象者

同法人の利用者10名、うち9名が同法人の通所施設を利用

しており、その利用期間は1年程度から10年以上。もう1名は生活支援センターを相談のために利用している。年齢層は30代を中心に20代前半から40代前半まで。障害種別としては、統合失調症が7名、社会不安が1名、うつが1名、てんかんが1名となっている。

(3) 方法

今回の試行においては、第1期として情報の提供を中心とした職業ガイダンスを、第2期としてトータルパッケージの集中実施を位置づけ、第1期と第2期との間に約2ヶ月の間隔をおいて実施した。また、原則として対象者は第1期及び第2期ともに受けている。

3 職業ガイダンス

(1) 目的と内容

* 対象者が一般就労について考え、施設職員との就労についての相談の際に共有できる知識と情報をコンパクトに提供すること。

具体的には、障害の受容やバランスの取れた職業意識の醸成に必要な知識であり、就労及び就職活動に必要な情報の提供。また、講義だけでなく、精神障害者が障害を開示して働いている職場の見学を取り入れた。

* 障害や作業能力についての自己理解を進めるために、M-ストレス・疲労アセスメント

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
					9:30 見学 事業所見学	
10:00	オリエンテーション 自己紹介、日程説明、同意書説明	講義 就労支援Ⅲ ①MSFAS(ソ+H)の記入 ②生活障害として捉える	演習 履歴書の書き方Ⅱ 履歴書を書いての質問	講義 就職活動の進め方Ⅲ ハローワークの使い方		10:00 演習 面接の受け方Ⅱ 模擬面接
10:50	休憩					10:50 休憩
11:00	講義 就労支援Ⅰ 精神障害者の就労支援制度	講義 就職活動の進め方Ⅰ ①MSFAS(ソ+H)の記入 ②働き方について考える	体験 作業体験Ⅰ MWS(簡易版)の体験	講義 就職活動の進め方Ⅳ 求人情報の見方		11:00 GW ガイダンスを受けて 自分らしい働き方について 休憩(昼食)
11:50	休憩(昼食)					11:50 休憩(昼食)
13:00	講義 就労支援Ⅱ ストレス・疲労への対処とMSFAS	講義 就職活動の進め方Ⅱ 自分に合った働き方を考える	体験 作業体験Ⅱ MWS(簡易版)の体験	体験 作業体験Ⅲ		13:00 演習・相談 自分を知るⅡ
13:50	休憩					13:50
14:00	演習 自分を知るⅠ MSFAS(ソ+H+BCF)の記入	演習 履歴書の書き方Ⅰ ①履歴書の種類と書き方 ②履歴書用ワークシートの記入	演習 面接の受け方Ⅰ 面接用ワークシートの記入	MWS(簡易版)の体験	14:00 GW 事業所を見学して	14:00 MSFASの再記入と個別相談
14:50	GW				14:50	14:50
15:05						15:05

図1 職業ガイダンス 日程表

シート（以下「MSFAS」という。）を記入し、幕張版ワークサンプル（以下「MWS」という。）簡易版の体験を行った。

（２）期間

対象者の体調や疲労の度合いを踏まえ、２日間連続で行い、２日目と３日目、４日目と５日目の間に１～２日の休日を設定し、計６日間実施した。

（３）実施体制

講義、演習、グループワークについては、講師である当センター職員１～２名と施設職員が１～２名程度、ワークサンプル簡易版については当センター職員３人と施設職員３名が携わった。

（４）実施状況

イ 講義・演習

障害の受容やバランスの取れた職業意識の醸成に必要なと考えられる疾病の生活障害としての捉え方や障害の表れ方としてのストレス・疲労について、精神障害者の就労援助施策や職業能力、障害を前提にした働き方についての講義とともに、就職活動において必要となる具体的な知識として履歴書の書き方、面接の受け方、就労支援機関の利用方法、求人票の見方についての講義を行った。

また、面接の受け方においては、ロールプレイでの模擬面接を行った。

ロ 見学

精神障害者社会適応訓練事業を実施しており、電子部品組立を行っている事業所を見学し、事業主から受け入れ状況についての話を伺った。

ハ MWS簡易版

MWS簡易版１３課題の中から各対象者７～１３課題を行った。対象者へのストレスを少なくするために、対象者の希望に沿った課題選択を行った。第二期にはMWS訓練版の集中的な実施を予定していたため、MWS訓練版への導入として位置づけた。

ニ MSFAS

自らの疲労やストレスについての認識や対処行動の状況を意識付けするためのMSFASの記入を前半に位置づけた。

出席状況は、６日間出席した者が８名、５日間出席した者が１名、４日間出席した者が１名となっている。

（３）結果

イ 障害認識のひろがり

自らの障害を疾病や症状として捉えるだけでなく、「生活障害」として捉えなおすことで、生活

ひいては仕事上、作業遂行上の不具合として捉えなおすことができ、対処行動に繋がることや認知機能障害として捉えなおすことで、能力の低下を補完する方法の習得への意識付けを図った。これらの知識を得ることで、病気を症状だけでなく、自分の生活上の不具合やストレス・疲労への対処、補完方法の必要性として捉えなおすといった具体的な広がりが見られた。

ロ 自分に合った働き方の可能性

これまで、障害を開示して働いた経験を持っていない人たちが対象であり、非開示での辛い経験の上で「一般就労」を捉えていたものが、「開示した場合には、企業と自分とジョブコーチで良い形で新しい働き方ができる」「自分にとっては開示が合っているのかなと思った。考えが変わった。昔は無理をしていた。」「（見学先では）体調・症状に合わせて一日２・３時間で週２日でもいい」といった発言が振り返りの場に出てきており、就労支援や開示して自分に合った働き方をすることが具体的なイメージとして捉えられ、一般就労を考える際の選択肢のひとつとしての可能性が示されるようになったといえる。

また、就職活動に直接必要となる実務的知識を得ることが、対象者にとっては就職活動のイメージの具体化として有効に働いたと考えられる

ハ MWS簡易版

MWS簡易版を実施することで、それぞれの対象者の作業への志向性や作業遂行上の特徴を把握することができ、また、対象者にとっては様々な具体的な作業を行うことで作業を行う自分自身の状況や意識を体感することができた。このことは、MWS簡易版が第二期において行うMWS訓練版に向けたアセスメントとして機能したと理解できる。

ニ MSFAS

日常生活で改めて取り上げられることの少ない「疲労やストレス」について、「初めて言葉で自分を考えたと感じた。なにか対処法はあるかと聞かれてもないけど。」と感想を述べている対象者もあり、文字にすることの有効性ととともに、継続的な支援における活用の重要性も併せて示された。

４ トータルパッケージ

（１）目的と内容

- * 作業遂行能力の向上とセルフマネージメントスキルの習得に向けたトータルパッケージの実施。
- * 認知上の特徴を把握するとともに補完手段の

1日目		2日目		3日目	4日目	5日目	6日目		
10:00	オリエンテーション	WCST	メモリーノート	MWS (個別に実施、休憩は随時)			MWS 個別面接実施者以外の人は引き続き実施。	個別面接入れ替わりで実施。終了後メモリーノートに感想を記入。	
10:50	休憩								
11:05									
12:00	WCST	メモリーノート	MWS	WCST、メモリーノート実施は入れ替わりで実施、それ以外の人はMWSを実施					
昼休み									
13:00	WCST	メモリーノート	MWS	MWS (個別に実施、休憩は随時)				MWS	個別面接
14:40	WCST、メモリーノートは入れ替わりで順番に実施							GW	トータルパッケージを受けて
15:00	帰りの会(随時実施)								

図2 トータルパッケージ実施日程表

重要性についての気づきを促すためのウイスクンシン・カード・ソーティングテスト(以下「WCST」という。)を実施。

* セルフマネジメントスキルの習得の際に用いるM-メモリーノート(以下「メモリーノート」という。)の集中訓練を実施し、この期間中の積極的な使用を図る。

* 自らの作業遂行上の特徴と補完方法の必要性、疲労の作業遂行への影響等についての理解を深めるとともに対処行動について習得を図るためMWSを行う。

(2) 日程

職業ガイダンスの2ヶ月後に、同様の休日設定を行い、6日間に渡って実施した。原則として初日及び2日目にWCST及びメモリーノートの集中訓練を個別に実施し、それ以外の時間については、MWS訓練版を実施した。職業ガイダンスにおいて、MWS簡易版を実施していなかった1名だけ、MWSを簡易版から開始した(図2参照)。

(3) 対象者

職業ガイダンスを受けたものうち9名、属性、出席日数については、表1のとおり。

(4) 実施体制

WCSTについては対象者3名に当センター職員が1名、メモリーノートの集中訓練については、1対1で実施し、指導は施設職員2名が行った。

MWS訓練版については、当センター職員2～3名で実施した。

(5) 実施状況

トータルパッケージ集中実施以前に、職業ガイダンスの実施状況及び結

果、その後の状況を踏まえ、施設職員と当センター職員との間で、各対象者についてのトータルパッケージの実施に向けて課題の整理が図られた。

イ WCST

初日、2日目に実施。各対象者の作業遂行上の特徴としてのワーキングメモリーの活用状況や補完手段の取り入れ方について把握することができ、その後のMWS訓練版における作業遂行状況

や課題選択に向けた手掛かりを得ることができた。

ウ メモリーノート集中訓練

メモリーノートをセルフマネジメントスキルの習得のためのツールとして使用するため、WCSTと同様に初日、2日目に実施。新規学習の場面として捉え、理解・判断力の状況、ワーキングメモリーの状況などを推測することができた。

エ MSW訓練版

実施状況は表1に示したとおり。

基本的な進め方を以下に示す。

職業ガイダンスにおけるMWS簡易版の実施状況、WCST及びメモリーノート集中訓練の状況から作業遂行上の特徴をアセスメントし、一人ひとりの作業遂行上の課題と必要であって習得可能なセルフマネジメントスキルを検討の上、MWS訓練版の本格的な実施に移行した。実施課題の選択にあたっては、基本的には各対象者の希望に沿って行ったが、個別アセスメントの状況を踏まえて当センター職員から課題の提案を行うこともあった。

セルフマネジメントスキルについては、メモリーノートを用いた行動の振り返りを基本にMWS訓練版における適切な課題選択、重要メモの利用や見直しのなど補完方法の導入による作業遂行の安定化を踏まえ、「休憩シート」を用いての疲労のモニタリング及び作業実施の計画化を図った。

表1 MWS実施状況

対象者	A	B	C	D	E	F	G	H	I
性別/年齢	女/30代	女/30代	女/30代	男/30代	男/30代	男/30代	男/30代	男/20代	男/20代
出席日数	6日間	4日間	3日間	6日間	6日間	6日間	6日間	5日間	6日間
障害名	統合失調症	統合失調症	統合失調症	統合失調症	統合失調症	統合失調症	統合失調症	統合失調症	社会不安
MWS	訓練版 数値チェック 物品請求書 ピッキング ナフキン折り HW版 家計簿作成	簡易版 ラベル作成 数値チェック 物品請求書 作業日報 ピッキング 数値入力 文書入力 コピー&ペースト ファイル整理 検索修正 訓練版 検索修正	訓練版 数値チェック ピッキング 物品請求書	訓練版 数値チェック 物品請求書 フラグタッ組 数値入力 ラベル作成	訓練版 数値チェック 数値入力 文書入力 検索修正	訓練版 数値チェック 文書入力 物品請求書	訓練版 数値チェック 重さ計測 物品請求書 HW版 宛名書き	訓練版 数値チェック ラベル作成 文書入力 数値入力 検索修正	訓練版 数値チェック 物品請求書 フラグタッ組立 作業日報 数値入力 ファイル整理 検索修正

(6) 結果

イ メモリーノートの活用

今回、各課題の終了時や一日の終わりに作業を行っての感想、作業を行って気づいたことや自らの状況などをメモリーノートに記述してもらった。自分の作業振りや疲れ、自分の行動とその変化などを文字に表して見返すことで、自らの作業状況や行動に対する振り返りが深まったように考えられる。また、作業上の留意事項をメモリーノートに記すことで「メモを作ることで頭が整理されて、迷うことが少なくなった。」と振り返ることのできた者もあり、補完方法としての利用も図られていた。

ロ 作業における認識の変化

(イ) 正確性と安定性の重視

作業遂行に当たってスピードを重視した傾向を示すことの多い対象者にあっても、正確な作業へのフィードバックを繰り返すことで、最終日の感想として、「スピードではなく、正確に安定的に働くことが大事だということがわかった。」とメモリーノートに記しており、作業遂行上の枠組みの変化として捉えられよう。

(ロ) 疲労のモニタリングと休憩の取り方

MWS訓練版においては、作業遂行におけるミスの表われる原因として疲労を重視している。そのため、作業にミスが表れた場合に「疲れていませんか。」「気分はどうか。」といった体調や疲労の自覚を促すきっかけを行っている。その上で「休憩シート」を用いて、選択的あるいは計画的な休憩を取るよう支援した。このような試みを通じて、作業時間が1時間を超えると自発的に15分程度の休憩を挟むというペースを守り、安定した作業遂行を図ることができるようになった者が出てきており、新たな疲労と休憩との関係を体感することができているように思われる。

ハ 自立的な作業遂行

前述した疲労度のモニタリングをもとに作業時間に対して一定の休憩を組み合わせ、安定した作業遂行が可能になった者においては、一定時間内の作業量や作業の出来具合に応じた試行数の調整など自らの作業能力に応じた作業計画を立てることができた者もいる。

以上に述べたような認識や行動の変化について、作業を通じて体感できることがMWSの特徴として挙げられる。

4 まとめ

トータルパッケージ最終日のメモリーノートに「仕事の仕方として分からないことをメモに細かくとることが、一般就労だと時間の余裕もないと思っているが告知就労であれば重要メモの作成時間ももらえるだろうと気がついた。それとジョブコーチがいれば、メモを取る助けになるし、自分の働き方のペースをつかむ助けになってもらえるかも。」と記した者がいる。

職業ガイダンスで得た就労支援についての情報を踏まえ、「トータルパッケージで補完方法習得」のきっかけをつかみ、「支援を受けながら習得した補完方法を活用する」という自らの就労イメージを作り上げることができたように思われる。

このような就労についての具体的で肯定的な自己イメージを喚起することができた対象者がいたことは、職業ガイダンスとトータルパッケージを組み合わせた今回の試行の持つ有用性を示しているように思われる。

しかしながら、現時点では、試行の詳細について報告できるまでにデータの整理が進んでおらず表面的な指摘に留まっている。

今後、データの分析を進めるとともに、協力いただいた対象者、施設職員等からのご意見もいただき、社会福祉施設の就労支援におけるトータルパッケージの活用の枠組みを示したいと考える。

<引用>

1) 勿田文記:精神障害者に対するトータルパッケージの活用「第13回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集」pp204-205

<文献>

障害者職業総合センター調査研究報告書No.55「多様な発達障害を有する者への職場適応及び就業支援技法に関する研究」2003

障害者職業総合センター調査研究報告書No.57「精神障害者を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)」2004

佐藤修子:精神障害者社会復帰施設での就労支援におけるトータルパッケージの活用と展望「第13回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集」pp206-207

障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房「笑い太鼓」 における就労支援への移行を目指した取り組みについて

－M－メモリーノートとM－ワークサンプルの活用について－

- 池谷 祥子（愛知障害者職業センター豊橋支所 障害者職業カウンセラー）
- 池田まさみ（障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房笑い太鼓 指導員）
- 加藤 俊宏（障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房笑い太鼓 指導員）
- 武藤 香織（愛知障害者職業センター 障害者職業カウンセラー）
- 刎田 文記（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

1 はじめに

障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房 笑い太鼓（以下「笑い太鼓」という。）においては、平成13年より授産施設を立ち上げ、一般就労へ向けた高次脳機能障害者の自立支援を行っている。平成15年からは、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構 愛知障害者職業センター豊橋支所（以下「センター」という。）と連携し就労支援を行っているが、一般就労の難しさを感じているところである。

高次脳機能障害者の一般就労への移行支援では、補完手段の重要性がすでに指摘されているところであるが、本人が補完手段の必要性を感じていない、活用の習慣づけがなされていないために、事業所で補完手段を使うことができず、結果として職場不適応に至る者が多かった。

そこで、笑い太鼓とセンターが連携し、効果的な職業リハビリテーションを実施することとした。具体的には、笑い太鼓の活動内容を見直し、日々の活動の中で各自に必要な補完手段を活用し、事業所においてもそれらの般化を可能とする取り組みを行うこととした。その一環として、利用者自身が自分で自分の行動を管理できるようにするため、まずM－メモリーノート（以下「MN」という。）の活用を取り入れた。

今回は、その実践経過を報告し、MN導入の効果を考察する。併せて、就労支援の取り組みの経過も報告し、今後について検討を行うこととする。

2 方法

（1）対象者

笑い太鼓を利用する、高次脳機能障害者16名、精神障害者2名を対象とする。

（2）方法

まず、導入対象者がセンターに来所し、

Wisconsin Card Sorting Test（以下「WCST」という。）を実施した。そこで障害状況の把握を行うとともに、補完手段が必要であることを本人自身に認識させ、必要に応じて補完手段の活用訓練を行った。次にMN導入訓練を行った。MN訓練の手順は、手帳の構造の説明、参照行動訓練、構成行動訓練、記入行動訓練、である。

作業所全体への導入については段階的に行った。指導員がMNに慣れる時間を考慮し、最初は確実にMNを使いこなすことが期待でき、更に指導者からみて最もMNが必要だと思われる2名を選定し導入した。1ヶ月後、同様に2名を選定し導入を行った。笑い太鼓での生活の中でこれら4名がNを使いこなすことができるようになるのを待ち、また先の4名の効果を残りの利用者が目の当たりにし、MNを使いたい、という意欲をもたせた上で、残り全員に一斉に導入した。

その後は、笑い太鼓への通所を通じ、利用者全体に対してMNの自発的な活用、般化に向けて指導を行うこととする。笑い太鼓におけるMNの活用の場面としては、毎朝のミーティングで一日のスケジュールを記入する、家族への伝達をするよう指示を出す、作業場面等で注意をされたらその場で記入する、夕方のミーティングでMNを見ながら一日の振り返りを行う、作業手順書を作成する、等である。

3 結果

（1）笑い太鼓利用者の一般的特徴

利用者のうち、高次脳機能障害者16名の特徴は以下の通りである。

- 年齢：20代3名、30代6名、40代4名、50代3名。
- 受障理由：交通事故等による頭部外傷10名、脳血管障害4名、その他2名。
- 受障からの経過年数：1年以内1名、1年以上2年未満1名、2年以上14名。

事例2)

・対象者の概要：34歳男性、昭和63年に交通事故により受障する。主たる障害は遂行機能障害である。

・MN導入前：一日の予定や行動の段取りがわからない、忘れ物が多いなど、何かするときには、1つ1つ指示が必要であった。また、注意されたことが残り作業に集中することができないこともあった。

・WCST：検査の理解は比較的スムーズであり、8割程度の正反応が見られるが、ルール of 推測ができないことが分かった。ある程度、WCSTでカテゴリー達成できるため、補完手段の必要性を感じられにくかったが、ミス減らすためには補完手段が必要であることを2セッション以降で、体験し、説明し、本人も納得する。

セッション1 (CA=1, 保続性エラー=19)

セッション2 (CA=5, 保続性エラー=3)

セッション3 (CA=6, 保続性エラー=1)

セッション4 (CA=6, 保続性エラー=2)

・MN導入訓練：MN訓練では、自分なりのこだわりが抜けず、使い方の定着には時間を要した。

・MN導入訓練後：MNに一日の行動予定を記入し、通所するための準備を単独で行うことができるようになった。また、指示・注意されたことをその場でMNに記入するようになり、同じ指示や注意を受けることが減った。書字に時間を要するため、指示や注意を受けた時に指導員が内容を付せん書き、本人がMNに貼り付け、後でMNに自筆で記入するといった工夫を行っている。ただ、現時点ではまだ自発的なMNの活用には至っていない。例えば、他の利用者がMNを記入する様子を見て自分も記入する、活用すべき場面や使い方については他者からの働きかけを必要としている。



図2 メモリーノート活用例2

(4) 指導者の感じている効果

●円滑なコミュニケーションが可能になったこと。

以前は、夕方に一日の振り返りを行う際に、失敗や注意を受けたことの有無について指導者と利用者が口論になる、互いにネガティブな感情が残り、時には利用者の意欲をそぐ、プライドを傷つける等が見られていた。MN導入後は、失敗したら利用者がすぐにその内容をMNに記入し、夕方のミーティングではMNを見て振り返りを行うため、そのような感情的な齟齬が減っている。

●指導者間で一貫した指導が可能となったこと。

以前は指導員によって指示や表現の仕方が異なるなど、一貫した指導をすることが課題となっていた。MN導入後は、利用者が指導内容を記入し、指導員もMNをはさんで指導内容を確認している。その結果一貫した指導が可能となった。

●作業指導の効率化が図れたこと。

以前は、利用者によっては何度も作業手順を繰り返し指導していた。MN導入後は、MNに作業手順書を作成させ、「MNの参照」を指示するだけでよいため、同じことを繰り返し指導することが減少した。

●家族との情報共有ツールとしてMNを活用できるようになったこと。

以前は家族に伝達事項を確実に伝えるために、指導員が直接家族に連絡していたが、MN導入後は利用者がMNに記入し、家族に確実に報告ができるようになった。また、家族も本人のMNを見ることで、一日何をしていたのか容易に把握できるようになった。このように、MNを通じ確実な連絡、情報共有が可能になり、本人・家族・作業所の関係も安定したものとなってきている。

(5) 指導者の感じている現在の課題

●作業台にMNを置くスペースが無く机の下や別の台に置くことがあるため、必要な場面ですぐに記入・参照させられない場面もあること。

●利用人数が多く、指導員が内容のチェックを十分に行うことができない場合があること。

なお、これまでMNの使用を拒否するものはいない。その背景には、本人が利用の必要性を感じていることはもちろんだが、従来では作業所で日記帳を記入する習慣があったこと、メンバー全員がMNを利用していることによる集団の効果、が考えられる。

4 考察

(1) MN導入の授産施設運営における効果について

授産施設運営における効果は、指導の効率化、コミュニケーションの円滑化である。

指導の効率化とは、作業手順を作成する、一日の予定をMNに記入することにより、指導者が繰り返し指導する必要が減っていることにある。

コミュニケーションの円滑化とは、利用者との間で注意・指導の有無について口論にならない、繰り返し指導することによる感情的な対立が減少していることによるものである。

(2) MN導入の利用者に対する効果について

利用者にとって、MN導入により、指導者に言われなくてもMNを見れば必要なことが自分でわかること、行動できること、思い出せることなどは、自信回復に役立っており、障害受容を促している。つまり、MNの導入は、本人たちの自律的な行動形成を可能にしているといえる。

(3) MNの集団導入による効果について

今回の取り組みは、MNを集団に対して導入したことによる効果が大きい。全員がMNを毎日使用することで、補完手段を自然に受け入れている。また、互いに声を掛け合うことで活用の定着が促されている。更に、MNを利用し自律的な行動が可能になっている仲間を見ることで、更なる活用の動機付けが高まっているといえる。

実際に、移動時や屋外作業の際には、全員がMNを持参している。笑い太鼓の利用者の中には重篤な記憶障害や遂行機能障害の者も多い。それにもかかわらず、外出するときには誰一人としてMNを忘れることなく持参する習慣ができているのは、MNが、本人たちにとって、なくてはならない補完手段として確立されていることを示している。更に、笑い太鼓では、外出時にMNを持ち運びしやすいよう、職員がMNを入れるためのポーチを作製した。現在は、外出の際には、皆がこのポーチにMNや身の回りのものを入れて出かけている。

5 就労支援における取り組みについて

笑い太鼓の利用者のうち3名が、市内の大型量販店にて職場実習を行っており、そのうち1名については正式雇用が決定している。職務内容は、開店前の店舗内における品だし、商品の前だし、



図3 メモリーノート活用例 3

PC入力などである。笑い太鼓でMNの般化訓練が日常的に行われているため、実習生たちは皆自発的にMNを職場に持参している。ただ現在のところ、作業内容の手順や環境が整備されていること、移動が多い職場であるため持ち歩きに不便なこともあり、職場におけるMNの活用には至っていない。しかし、今後は作業手順や注意されたことの記入、職場と家族・作業所との連絡帳としてMNを活用していくことが見込まれている。

6 今後の展望

現在笑い太鼓では、一般就労に向けた次のステップとして、M-ワークサンプルを実施している。一般の事業所に近い作業を体験し、その中で補完手段の必要性をより一層理解させ、その活用の般化を促し、一般就労への円滑な移行を目指しているところである。

センターにとっては、MNなどの補完手段・支援ツールを支援者間で共有すること、対象者に関する指導経過を共有することにより、ジョブコーチ支援への円滑な移行を目指すことが可能になると考えている。

<引用・参考文献>

- ・障害者職業総合センター 調査研究報告書NO.64「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(活用編)」、2004.3
- ・障害者職業総合センター 調査研究報告書NO.57「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(中間報告書)」、2004.3

地域障害者職業センターでの家族支援技法における トータルパッケージホームワーク版の活用

○石原 まほろ(佐賀障害者職業センター 障害者職業カウンセラー)
 崎原 妙子・松本 聡恵(佐賀障害者職業センター)
 刎田 文記(障害者職業総合センター障害者支援部門)

1 はじめに

障害者職業総合センター障害者支援部門では、平成16年度より、自宅での自学自習を可能とすることを目的とした『トータルパッケージにおけるMWS(幕張ワークサンプル)ホームワーク版(以下「MWSホームワーク版」という。)]の開発をすすめている。

本稿では、佐賀障害者職業センター(以下「当センター」という。)における、MWSホームワーク版の実施状況について報告し、今後の活用可能性について検討する。

2 当センターにおけるMWSホームワーク版活用状況

(1)実施状況

MWSホームワーク版は、職業リハビリテーションサービス待機者、生活リズムの改善が必要な者、家庭内自立を指向している者などを想定して開発されたものである。しかし、職業リハビリテーションサービスを受けている者に対しても、多様な目的での活用が望めるものと考えられたため、当センターでは、職業準備支援及びリワーク支援において、MWSホームワーク版を活用している。職業準備支援においては、①知的障害者でMWSホームワーク版の課題の内容が本人にとって難しい、②就職先として、製造加工業などを希望しており、MWSホームワーク版の課題への動機付けが生じにくい、③同居している家族の養育能力が低い、などの理由で、利用の効果が望めない対象者が含まれていることから、障害者職業カウンセラーが効果が望めると判断した対象者に対し、MWSホームワーク版の実施を提案している。一方、リワーク支援においては、決められた課題をこなすことにより、自宅での生活リズムを整えることができること、MWSホームワーク版が復職に向けての自信の回復に役立つツールであることなどから、支援利用者全員に、MWSホームワーク版の何らかの課題に取り組んでもらうこととしている。取り組む課題の選定は本人の希望を考慮し、障害者職業カウンセラーとの面談を通じて行っている。

(2)事例

当センターにおいてMWSホームワーク版を活用した事例の中から3事例をあげ、取り組みの経過を述べる。

表1 対象者の属性とMWSホームワーク版の実施状況

課題	宛名書き課題	健康管理グラフ	家計簿作成	OAWork	MSFAS
対象者名(概要)					
A(20代、男性、精神障害)			○	○	○
B(20代、男性、知的障害)	○				
C(40代、男性、高次脳機能障害)		○			

(3)活用の実際

イ 対象者A(20代、男性、精神障害)

(イ)障害状況

- ・精神障害者保健福祉手帳は不所持。定期的な通院及び服薬により症状の安定が図られている。
- ・体力が低下しており易疲労性が窺える。
- ・失敗に対する不安が強く、新しい環境での緊張感が強い。

(ロ)生活歴

- ・大学時に精神科初診。当時は悪口や噂されているとの気持ちが強く、自宅に引きこもっていた。
- ・大学卒業後は、公務員試験の勉強や翻訳のアルバイト(20日間)、市役所の窓口業務(半日程度)、スーパーの商品の陳列(10日間)などの就労経験あり。フルタイム就労は体力的に負担が大きく継続が困難であった。

(ハ)取り組みの経過

平成17年12月から平成18年2月まで当センターの職業準備支援を利用。事務職を希望していたため、事務職への適性の見極めと本人及び家族に障害特性について理解を深めてもらう目的でMWSホームワーク版のOAWork及び家計簿作成を実施した。課題の選定は難しい課題に取り組んでみたいとの本人、家族の希望を考慮して行った。

OAWorkは、当センターのワークトレーニング社内ですら主にセルフチェックモードで実施した。数値入力、文書入力、コピー&ペースト、検索修正課題いずれ

も本人にとっては簡易な課題であったため、ほとんどミスなく全てのLevelを次々にこなしていくことができた。

MSFASは、ストレスや疲労とのつきあい方を考える目的で使用することを本人に伝え、職業準備支援の第2週目に、利用者用シート全てを、本人に記入してもらった。その結果、シートFのストレスや疲労の生じる状況について、本人が自覚しているサインが少なかったため、評価アシスタントから見て疲労のサインと思われた事項について本人の自覚を促すことをめざした。また、疲れを感じた際の対応方法が「できる限り我慢する」というものであったため、ワークトレーニング社内では、疲労から作業効率が著しく低下するような場合には、休憩を申し出てよいことについて本人に伝えた。

家計簿作成課題は2日間、ワークトレーニング社内内で実施し、作業手順の定着が図られていることを確認した後、家庭に持ち帰っての自学自習へと移行した。作業日は本人の希望により、月・水・金の週3回とした。Level1はミスもなく、母親からも易しすぎるのではないかとのコメントがあったため2ブロックで終了し、Level2に移行したが、Level2に取り組むようになってからは、残金等の転記ミスなど、毎回少しずつミスが生じたため、9ブロックまで実施した。本人は完璧に仕上げたいとの気持ちを継続して持ち続けていたが、細かな箇所まで注意が行き届かない点は障害特性のひとつと推察されたため、作業終了後に確認作業を行うことを、補完行動として障害者職業カウンセラーから提案した。その後Level3まで実施したが、補完行動の定着が図れたためか、実施した2ブロックはミスがなく、本人としても自信を得た形で課題を終えた。

対象者は現在、軽作業でパートタイム就労に従事しており、MWSホームワーク版の活用はしていないが、Excelで独自の家計簿作成を継続している。当初、対象者の作業を確認する母親が負担を感じるのではないかとの懸念があったが、対象者が自身で採点作業を行った後に母親に見せる形であったため、母親は確認作業に対して大きな負担は感じていないようであった。しかし、障害者職業カウンセラーと母親とのやりとりは、MWSホームワーク版実施中、数回程度であったため、母親が、対象者の障害特性を十分に理解するまでには到ることができなかったように思われた。就労の継続に際して、家族に支援者としての役割を担ってもらうためには、家族にも、本人の障害に対して理解を深めてもらう必要

があるため、本人のみならず、家族に対しても、障害特性から生じる課題、それに対応した補完手段の効果を、丁寧に説明していくことが必要と思われ、今後の課題となった。

ロ 対象者B(20代、男性、知的障害)

(イ) 障害状況

- ・療育手帳(B)を保持。受け答えはしっかりとしており、一見、障害を感じさせない。
- ・作業量が増えた際には焦りからミスを生じやすく、複数工程について同時に指示を受けると理解力が低下する。

(ロ) 生活歴

- ・一般高校卒業後、専門学校を修了。一般扱いで就労を多数経験。介護職や清掃員などで、短期間での解雇を何度か経験したことで、不器用さ、指示理解の悪さを自覚し、自信を無くしている。
- ・職業準備支援を利用中に、療育手帳を取得。

(ハ) 取り組みの経過

平成17年11月から平成18年2月まで当センターの職業準備支援を利用。簡易な事務作業への適性の把握と、家族の対象者に対する障害特性の理解を深めることを目的にMWSホームワーク版の宛名書き課題をLevel3まで実施した。課題の選定にあたっては、本人に適した課題を障害者職業カウンセラーから本人及び家族に提案し、了承を得た上で取り組みを開始した。仕様書を自分で読み、手順を理解する力が十分ではなく、日数が経過すると理解の保持があいまいになる対象者であったため、当センター内で課題に取り組む期間を1週間程度設けたのちに自宅での自学自習へと移行を図った。

作業導入当初、対象者から障害者職業カウンセラーに対して、進捗の確認をしてほしいとの申し出が頻繁に見られ、作業に対しての意欲が強く感じられた。しかし、当初、父親がコメントを書いてくれたが、定型のコメントがほとんどで、後半になると、忙しさが増したため、そのコメントさえ、もらえなくなったこともあり、後半は意欲が減退したようにも感じられた。作業ぶりは「様」の書き忘れや字体の誤りなどのミスが多く、手本どおりに仕上げることを障害者職業カウンセラーから何度となく指摘するも、定着を図ることは難しかったが、本人としては取り組みを通じて、字が上手になったとの達成感を得て、課題を終えた。

ハ 対象者C(40代、男性、高次脳機能障害)

(イ) 障害状況

- ・伝えたい言葉をすぐに思い出せないことがあるが、日常の雑談程度の会話への対応は可能。

- ・指示内容が複数工程になると理解力の低下が見られる。
- ・自分に障害があることは理解しているが、具体的などのような障害を有しているか理解できていない面がある。

(ロ)生活歴

- ・大学卒業後、製造関係の企業に入社。
- ・平成14年に管理職として勤務中にくも膜下出血を発症。3年間の休職期間を経て職場復帰し、現在は就業中。

(ハ)取り組みの経過

平成17年10月から平成18年1月まで当センターのリワーク支援を利用。簡易な作業に取り組むことにより自信の回復を図ること、健康の自己管理について意識してもらうことを目的にMWSホームワーク版の健康管理グラフ作成を実施。Level1は当センター内で実施し、その後は自宅に持ち帰り自学自習を進めてもらった。当センター内での作業時には、対象者にとって、仕様書だけでは理解が難しい箇所について、ポイントをしばって記した手順書を用いた方が手順の理解がスムーズとなること、また問題用紙にチェックをつけながら作業を進めると確実さが増すことなど、自分自身の障害や補完手段について理解を深めることができた。

自宅では妻が毎日確認作業を行い、コメントを書いてくれたことが本人にとっては励みとなったこともあり、Level5まで順調に作業を進め、終了となった。

本人にとって、課題は簡易な内容であったが、レベルが上昇し難易度が増してもほとんどミスなく作業を進められたこと、徐々に作業時間の短縮が図れたこと、課題の実施から結果の自己採点まで自分で次々と行うことができ、自分自身で管理しながら進めているという実感を得ることができたことは、職場復帰にあたって、自信回復の要因のひとつとなったようであった。

3 考察

事例での取り組みを通じ、MWSホームワーク版の効果と、当センターにおける活用上の課題について整理する。

(1) MWSホームワーク版の活用の効果

イ 障害理解の促し

事例1や2のように、正確な作業遂行に課題が把握される対象者については、MWSホームワーク版へ取り組む中でも、同様の課題が浮き彫りとなることが多い。勿田他¹⁾によれば、障害者の職業生活を支えるためには、事業所の理解や専門家によるサービスだけでなく、

家族が継続した支援を行える支援者としての機能を果たすことが必要であることが指摘されているが、MWSホームワーク版は、実施者にとっての課題を、本人や家族に伝える契機としての活用が期待できるツールであると思われる。

ロ 自尊心の回復

リワーク支援の対象者がMWSホームワーク版を活用する場合、課題の難易度は対象者にとって無理なく取り組める程度のものである。したがって、事例3のように、ほとんど誤りなく作業を遂行できることや時間の短縮が徐々に図られることによって、対象者の自尊心の回復にあたっての一助となりうるものと考えられる。

ハ 作業終了後の般化

事例1においては、家計簿作成課題を通じて、家計簿を作成することの楽しさについての認識を高め、MWSホームワーク版の取り組みを終了した後、自らExcelにて家計簿をつけるという習慣が身についた。また、事例3においても、健康管理グラフ作成課題に従事したことを機に、健康管理の重要性についての発言が対象者から見られ、自身の健康に目を向ける契機となったことが窺われた。以上のことから、MWSホームワーク版は、対象者に適した課題を選択することで、終了後に適切な行動の習慣化が期待できるものと推察される。

ニ 本人と家族の関係性の変化

事例3では、家族で課題に取り組んだことによって、他の家族との関係性に変化が生じていた。例えば、対象者は作業終了後に、毎日、妻に確認作業をしてもらっていたが、そのことにより夫婦間のコミュニケーション場面が定期的に確保され、家族が支援者としての役割を果たすための基盤を構築する上での一助となっていた。また、健康管理グラフは家族の健康指標を記録するという内容となっているため、対象者自身、自分の家族へ思いが及ぶことがあったようである。また、外見からはわかりにくい障害であったことから、子供が対象者に対し、自宅に取り立てて何もせずじっとしている父親というイメージを持ち、反発することもあったが、MWSホームワーク版を自宅で実施することで、頑張っている父親の姿を見た子供の態度に変化が表れるなどの効果も見られた。以上のことから、MWSホームワーク版を活用することで、実施者本人と家族との関係性を良好にする効果が期待できるものと推察される。

ホ MWSホームワーク版活用目的の多様性

MWSホームワーク版の実施目的は、対象者の状況によって、多様に想定可能と推察される。当センター

においては、上述したように、対象者や家族の障害理解の促進や、自尊心の回復、終了後の般化を目指すなどの目的で使用している。

MWSホームワーク版の特徴のひとつに、課題実施者本人と支援者(家族等)によって、実施～採点・評価までを行えるような配慮がなされていることがあげられる。例えば、本人用と支援者用の仕様書の準備がなされていることや、健康管理グラフ課題であれば、健康指標(体重・万歩計の歩数・血圧・脈拍)のデータを保持している家族の各構成員が、具体的なストーリー設定のもと構成されており、課題への親しみを保ち易いような工夫がなされていることがその例である。そのため、いずれの事例においても、課題の導入にあたって利用者が抵抗感を抱くことはなく、スムーズな取り組みがなされた。事例2の対象者など、マニュアルを自分で読み理解する力を十分に有していない対象者であっても、自学自習に移行する前に、支援者の下で手順の定着を確認することで、スムーズな自学自習へと移行できた。以上のことから、MWSホームワーク版は多様な目的で、スムーズに導入が望めるツールと考えられる。

当センターにおいては現在の所、全ての利用者について、職員の支援の下、課題に取り組んでもらう期間を設けた後、自宅で取り組んでもらうこととしている。位上3)によれば、MWSホームワーク版の活用にあたっては、家族と地域センターのみならず、作業所等の関係機関との連携により、ツールの活用可能性が広がるのではないかと指摘されていることから、今後は、関係機関との連携により、導入時に必要な支援を、関係機関に実施してもらう方法も導入したいと考える。

(2)MWSホームワーク版実施の課題

MWSホームワーク版の導入が本人や家族の障害理解の契機となりうることについて上述した。しかし、事例1においては、障害者職業カウンセラーがやりとりしたのは主に本人のみであり、母親に対しては、作業の状況について十分な情報提供を行うことができなかった。したがって、母親は、誤りの原因は本人の単なる注意ミスであり、真剣に取り組めば改善が図れるものとの認識が強く、複数工程をこなすと誤りが生じやすいなどの対象者の障害特性について十分に理解を深めることができなかった。家族に、本人の障害特性について十分に理解してもらうためには、支援者と家族との間で定期的なコミュニケーションの機会を確保することが必須と思われ、自己評価用紙を通じたやりとりだけでは十分でない場合には、電話で頻繁に連絡を取りあうなどの方法について検討する必要があるものと思

われる。

また、今回、MWSホームワーク版の実施にあたっては、事前に医療機関に課題内容を提示した上での実施等は行わなかった。しかし、自宅で作業を行うことにより利用者には負荷がかかること、また、利用者を傍らで見る家族が不安を覚えることも考えられることから、負荷とどうつきあっていくかについて、医療機関から情報提供を依頼するなど、連携の下で取り組んでもらう必要があるものと思われる。

4 結語

当センターにおいて、平成17年度にMWSホームワーク版を活用した事例についての状況を踏まえ、効果と今後の取り組みの課題について検討した。当センターにおけるMWSホームワーク版の活用は、一定の効果をあげていると言えるが、実施した事例は決して多くないのが現状である。また、家族支援を念頭においた場合、対象者の状況のみならず、家庭の状況によっても実施方法上の配慮や効果が異なるものと推察されるが、今回の報告では、その点において十分な考察を深めることができなかったと言える。今後も取り組みを継続する中で、本稿における検討を更に深めていきたいと考える。

<参考文献・引用文献>

- 1) 勿田文記他:「事業主、家族との連携による職業リハビリテーション技法に関する総合的研究」の枠組、「職業リハビリテーション研究発表会論文集」,pp.11-12,独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構(2004)
- 2) 岩崎容子他:トータルパッケージホームワーク版の開発 MWSホームワーク版-事務課題-,「職業リハビリテーション研究発表会論文集」,pp.13-16,独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構(2004)
- 3) 位上典子他:地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について、「職業リハビリテーション研究発表会論文集」,pp.112-115,独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構(2005)
- 4) 小池磨美他:発達障害者に対するトータルパッケージの活用、「職業リハビリテーション研究発表会論文集」,pp.200-203,独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構(2005)
- 5) 木村彰孝他:養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望、「職業リハビリテーション研究発表会論文集」,pp.208-211,独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構(2005)
- 6) 障害者職業総合センター:高次脳機能障害を有する者の就業のための家族支援のあり方に関する研究、障害者職業総合センター調査研究報告書No.58(2004)

養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望(3)

－ ホームワーク版を含めた活用の実際 －

○木村 彰孝（山口県立防府養護学校 教諭）

菅 宣義（山口県立山口養護学校 教諭）

1 はじめに

トータルパッケージ（以下「TP」という。）の教育機関における活用について、2回にわたって報告を行ってきた（文献³⁾⁴⁾）。

今年度より、山口県立山口養護学校においてもTPの活用が開始され、本校を含め県内2校において、教育機関での試行が行われている。

今回は、ホームワーク版を含めた教育機関における活用事例を具体的に紹介したい。また、ワークサンプルを実施するにあたり、学校独自の「補完手段」の在り方についても考察を行いたい。

2 山口県立山口養護学校での実践¹⁾

平成12年度に開校された知的障害養護学校で、県下初の産業科の設置により、一般企業への就労を目指している。

特別支援教育への流れを反映し、様々な障害種やニーズへの対応が求められることとなった。

以下、本年度1学期間における試行を報告する。

(1) 教育課程の見直しとTP

前述に加え、場に応じたコミュニケーション力や職務の目的性理解、対人関係、自発性、自己評価など、職務に対する基本的スキルの育成についても、従来以上に考慮する必要がある。

このような状況の中でTPの試行は、教育課程、学習内容の見直しを模索するために行われた。

当初は、緊急性の高い産業科「職業教科」の作業種目として、M-ワークサンプル（以下「MWS」という。）を中心に試行することとした。

(2) TPの授業等での実施状況

ア 産業科2, 3年生

職業教科『就労実務（仮称）』

学年ごと2グループ（半年スパンで交代）

・2年生 … 6時間×7回（毎週木曜日）

・3年生 … 6時間×11回（毎週火曜日）

まず、MWS簡易版により、13種類すべてのワークサンプルに取り組み、適性や努力点を自己認識したうえで、MWS訓練版から課題を自己選択することを原則とした。また各生徒の達成度や

つまづきをチェックし、補完手段を講じた。

さらに、1学期末に生徒による自己評価、授業評価を実施した（図1）。

就労実務 授業評価				
氏名(A)				
各作業について				
作業内容	難しさ	役に立つ	今後	感想
数値チェック	○	◎	◎	少しずつミスをした
物品請求書	◎	○	○	少しでもかくにんを忘れていた
作業日報	◎	○	△	物忘れをしないようにする
ラベル作成	△	○	○	漢字入力をするようにする
数値入力	△	○	○	集中を切れないように気をつける
文書入力	◎	◎	○	漢字を確認する
コピー&ペースト	○	○	△	簡単すぎない
検索修正	◎	◎	◎	相手の名前をまちがえない
ファイル整理				
ナプキン折り	○	○	○	いろんなナプキン折りをしたい
ピッキング	◎	◎	△	コンセントをつくりたい
重さ計測	◎	◎	◎	少しずつ重さの勉強をしたい
ブラグタッパ	○	○	○	能率を出せるようにする
ペーパーフラワー	◎	◎	◎	いろんなフラワーを作りたい

◎難しい
○ちょっと難しい
△やさしい
×簡単すぎる

◎大変役に立った
○役に立った
△あまり役に立たない
×役に立たない

◎もっと続けたい
○続けてもよい
△あまりやりたくない
×全くやりたくない

就労実務の授業について
すこしずつ自信をつけながら、作業能率を出せるようにがんばる。

職業の授業でやってみたい作業や職種
食品や食べ物の量る作業をしたい。
料理やレストランの職業をしたい。

図1 生徒による授業評価

イ 産業科1年生全員、普通科1年生抽出者

校内実習『実務課オフィス班』

3名×4班 … 2日間ずつの体験（6月）

アと同様に、1日目は簡易版を中心に課題全般の内容を知らせ、2日目に自己選択により取り組む課題を決定した。

実習終了後に自己評価、担当者による評価を行い、以後の学習への参考とした。

(3) 学習対象者の状況

ア 対象者A

①属性 男性 高3 知的障害

②状況 パソコン操作には慣れているが、漢字に苦手意識があり、ワープロ使用にはルビが必要で

ある。小売店舗への就労を希望している。OA-WORKでは、補完手段として各Levelの漢字の読みを「ヒントカード」として活用した(図2)。

覚えてほしい 漢字	
レベル1 必ず覚えてほしい	人 私 日本 小さい 少し 見る 言う 生きる 美しい 好き 言う 日本語 初めて
レベル2 ぜひ覚えてほしい	今日 昨日 毎日 日 行動 こと 別 雪 数 思い出 車 問題 待つ 海 地区 本当 漢字
レベル3 しっかり覚えてほしい	初めて 始まる 出会う 上手 乗る 電車 祭り 時刻 発車 時間 時代 関係 中央 無い 大好き 地方 気 世界 本屋 女性 学生 夕食 切れ目 最大 彼 勤める
レベル4 努力して覚えてほしい	宇宙 地球 夢 誕生 現在 用意 勤める 本当 変換 喜ぶ 挨拶 申し上げます 皆様 皆様方 お願い 同様 起こす 陸上 貸す 性能 助手 今後 非常 英文 表明 当たり前 社交 性能 複雑 単語 思い返す 小さい頃 感激 厚く 企業 各 頂く
レベル5 聞きなれないことはも覚えると役に立ちます	立ち寄る 格別 ご愛顧 賜る 誠 連邦 農務省 次官 閲覧 最重要視 平素 お引き立て 御礼 共 一層 傲慢 略儀 御挨拶 同音異義語 扱い 残暑 厳しい 折 程 ご自愛 お祈り 彼方 故郷 懸念 桁違い 敵意 粒子 宇宙 線 普段 宇宙船 劇場 お陰 大過 寝不足

図2 ヒントカード作成例

イ 対象者B

- ①属性 男性 高3 自閉症
- ②状況 コミュニケーション面や巧緻動作に課題があるが、流通業でのメール便仕分けの実習に取り組んでいる。日常生活では、注意の集中や言語指示理解が難しいように感じることが多いが、ピッキング作業、検索修正課題等では、高い集中度と正確さを発揮した。

ウ 対象者C

- ①属性 男性 高3 ADHD
- ②状況 パソコンは家庭で日常的に使用しており、操作上の習熟度は高いが、業務目的への意識や自己チェック力の低さのため、エラーが頻発する。流通業での事務職を目指していたが難しさがあり、食品製造での実習に方向を転換した。

エ 対象者D

- ①属性 男性 高2 広汎性発達障害
- ②状況 作業途中での修正が難しい。指示書の読み取りが正確でなく、自分なりの解釈で活動を進

めることが多い。検索修正課題ではセルフチェックモードの使用でエラーが減じた。

オ 対象者E

- ①属性 男性 高2 LD傾向
- ②状況 活動の自己選択、意志表明等に難しさがある。初めての場面では緊張感が強い。作業遂行力は高く、ピッキング作業では正確さが向上した。

(4) 各課題に対する補完手段の考察

各課題の補完手段を考案するにあたって、以下の事項を配慮事項とした。

- ア できる限り自律的な作業遂行を可能にするための手段であること。
→ 言語等による直接指示を最小限に。
- イ 個の個性に合わせた手段であり、一律に提示するものではない。
→ 支援不足によるストレス、過剰な支援による自己努力の欠如等を避ける。

ウ 達成状況を観察しながら易から難へ系列的な支援手段を付加、工夫する。

(5) 今後の課題

- ア 生徒に対する課題提示の工夫
説明内容や手順等をマニュアル化し、より円滑な実施に資するようにする。

イ 実態に応じたLevelの選択、的確な作業指示
生徒の実態と各課題の難易度の照合に、かなりの時間を要した。今後は、これまでの実績から、効率化が図れると思われる。

ウ 実態に適合したさらなる補完手段の工夫

生徒の自律性を視点とした補完手段をさらに工夫する必要がある。

エ 教職員に対する実績報告

適応範囲のさらなる拡大のため、より具体的な課題内容、実施の手順等を多くの教職員に報告する必要がある。

オ M-メモリーノートの活用

各学級で独自の日誌や連絡帳を使用しているが、M-メモリーノート(以下「MN」という。)の内容について検討を進め、卒業後の生活の中での有用性を検討したい。現在、若干の修正を加えた、同種の手帳を使用している学級もある。

カ ホームワーク版の活用

現在本格的な活用には至っていないが、教科や学級活動で活用例が徐々に出てきている。家庭と学校間の連携媒体としての意義も含め検討の必要がある。

3 山口県立防府養護学校における実践

本校では、昨年度4月より在籍する児童生徒に対し、試行的な活用を行っている（文献^{3) 4)}）。

対象は、知的障害、肢体不自由、自閉症が主で、一部LD・ADHD・高機能自閉症等（以下「LD等」という。）も含まれている。

授業や校内実習、進路指導や移行支援、卒業後支援のツールとして活用してきた（表1）。

表1 取り組みの状況

活用場面	活用したツール	LD等	自閉症	肢体不自由	知的障害	脳梗塞
学級指導	MN(改良型)			○	○	○
授業等	数学 重さ計測		○			
	自立活動 プラグタツ組立		○		○	
	作業学習 OA-WORK文書入力		○			
	家庭学習課題 宛名書き	○			○	
	放課時間 OA-Work			○	○	
校内実習	パソコン班	数値入力	○	○	○	○
		文書入力	○	○	○	○
		コピー&ペースト	○	○	○	○
		ファイル整理	○			○
	事務班	数値チェック	○	○	○	○
		宛名書き			○	○
	ナブキン班	ナブキン折り	○	○	○	○
		洗濯物たたみ	○	○	○	○
	進路指導 移行支援	作業学習 実務課題全般	○			○
	卒業後 支援	対象者 自宅	ホームワーク版 OA-Work	○		

(1) 学級指導における M-メモリーノートの活用

高等部1年生の学級指導で、2学期より試行的に導入した。従来から各学級では、生徒の実態に応じた形式により、日課確認や家庭との連携のため、「連絡ノート」を使用している。しかし自律的な活用が充分なされているとは言い難かった。

そこで従来の連絡ノートの機能を残しつつ、生徒が自律的な活用が図れるよう、MNの様式を若干、学校用に改良したものを、学級指導の中で活用している（図3）。

「schedule / 今日の to-do」「to-do list」「重要メモ」の3様式を、「今日の予定 / 忘れてはいけないこと」「しめきりメモ」「大切メモ」というように、生徒に分かりやすい名称に変更した。

特に「忘れてはいけないこと」には、各生徒の課題となっていることを記入させ、セルフチェックさせることにより定着を図っている。肢体不自由のある生徒に「毎日帰宅後ストレッチをする」という課題を、一学期間は口頭指示では定着しなかったが、MNでセルフチェックを始めると、ほぼ毎日定着するようになってきた。

その他、口頭での注意では不適切な言動が改善されない事例について、導入を検討している。

「しめきりメモ」には、宿題の期限や、学校図書館で借りた本の返却日などを記入させて、タイムスケジュールの自律的な管理を促している。

活用の般化には、時間を要することになりそうであるが、生徒の取り組みは良い。

「大切メモ」は今後使用予定であるが、自分のてんかん発作等について知っておくべきこと、現場実習先の約束事、自宅や学校・主治医等の緊急連絡先、などを想定している

特に集中訓練等は設けずに、毎日の活用の中で般化させるようにしている。

年 月 日 ()

今日の予定 ~				忘れてはいけないこと ~
時間	科目など	場所	活動内容 (勉強したこと)	内容
8:50~9:05	学習活動	1階5組		<input type="checkbox"/> ストレッチをする
9:05~9:40	1			<input type="checkbox"/> 朝、歯みがきをする
9:55~10:25	2			<input type="checkbox"/> ハンカチを持って行く
10:40~11:30	3			<input type="checkbox"/>
11:45~12:25	4			<input type="checkbox"/>
12:25~12:30	給食	給食室	給食	
13:30~14:10	5			
14:25~15:05	6			
15:10~15:30	特別-学習活動	1階5組		
今日の感想・反省 (日記)				家庭-家の学習進捗-連絡簿から

図3 学校版M-メモリーノート ~ schedule/今日のto-to

(2) ホームワーク版の活用

ホームワーク版（以下「HW版」という。）の一部を、軽度知的障害、LD等の生徒の家庭学習の課題として活用している。実際には寄宿舎生の自習時間での取り組みとして、学級担任が毎日課題を持ち帰らせている（図4）。

現在のところ、事務課題の宛名書き課題に高等部1年生3名の生徒が、毎日コンスタントに取り組んでいる。Level5を残すのみとなった生徒は、

次の課題を心待ちにしており、家計簿作成課題と健康管理グラフ作成課題を提示したところ、「次は家計簿に取り組んでみたい」と意欲的である。

このように HW 版で段階的にステップアップを図りながら、(1)で示した MN の活用と MWS 訓練版を組み合わせた有機的な活用を検討している。

いずれの場合も、生徒が職業リハビリテーションのツールであることを理解していることで、他の教科課題等よりもモチベーションが高く、成果が上がってきていると思われる。

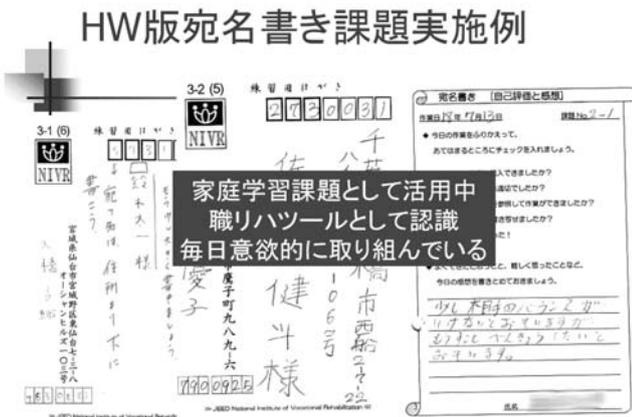


図4 HW版宛名書き課題実施例

3名の生徒はいずれも就労を目指しており、ホームワーク版に取り組むことにより、毎日の生活リズムを規則正しく保つことができ、就労生活にも生かしていこうという意識付けになっている。

(3) プラグタップ組み立て課題：自立活動

コミュニケーションスキルに課題のある知的障害の生徒に対し、週2時間実施している。補完手段として図6に示す作業指示書を用いた。自発的な作業準備、終了時の作業結果に関する報告等、未だ課題はあるものの、段階的な変容が見られるようになってきている。本人及び支援者の所見を図5に示す。

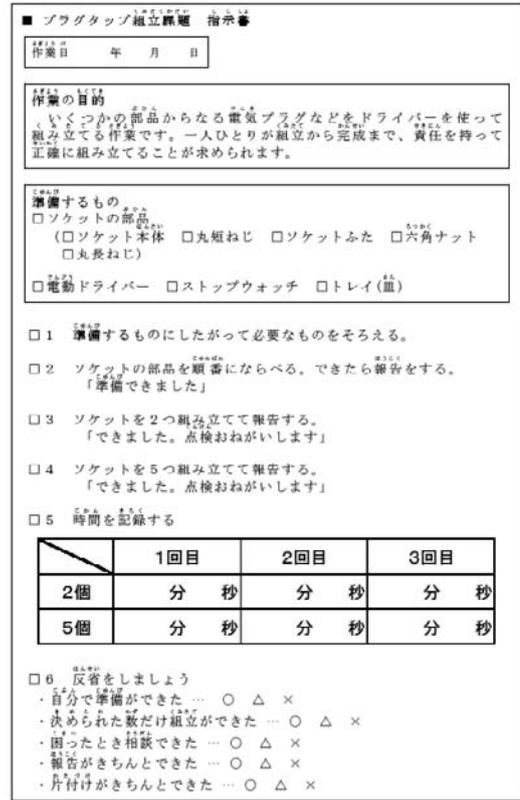


図6 プラグタップ組立課題の指示書の一例

4 今後の展望 ～関係機関連携の促進ツール

各機関における対象者の評価に差があり、共通の評価基準となり得るものがあれば、スムーズな連携が図れるのではないかと考えている。家庭で MWS-HW 版、学校で MWS 訓練版に取り組みながら、在学中から地域センターや就労移行支援事業所等と情報交換を行うことができれば、従来それぞれ単独で行っていた支援の幅が広がる可能性がある。本人・保護者にとっても、支援機関が移行しても同様な対応が期待できるため、見通しを持って、職業リハビリテーションサービスの軌道に乗ることができるのではないだろうか。

《引用・参考文献》

- 1) 山口県立山口養護学校職業科就労実務（仮称）担当グループ：知的障害養護学校におけるトータルパッケージの活用 ～ 2006 年度中間報告～，山口県立山口養護学校（2006）
- 2) 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）障害者職業総合センター調査研究報告書 No.57(2004)
- 3) 木村彰孝・大石文男：養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望，「第 13 回職業リハビリテーション研究発表会論文集」，pp.208-211，障害者職業総合センター（2005）
- 4) 木村彰孝：養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望（2），「日本職業リハビリテーション学会第 34 回大会講演予稿集」，pp.102-103，日本職業リハビリテーション学会（2006）

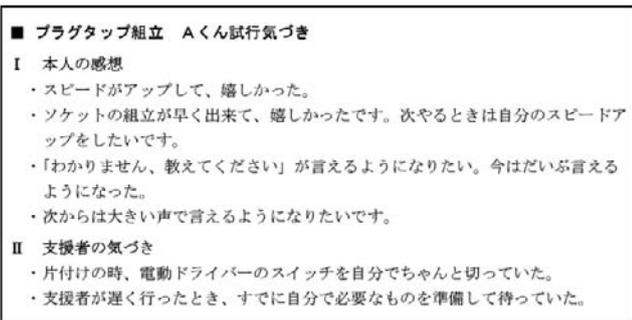


図5 プラグタップ組立課題 本人及び支援者の所見

家族支援の枠組みと関係機関の取り組みの課題

—家族のアセスメントと障害特性別の配慮—

○仲村信一郎（障害者総合職業センター障害者支援部門 研究員）

刎田文記・岡本ルナ・小池磨美・望月葉子・加賀信寛・小泉哲雄・岩崎容子・
清野絵・三宅淑子（障害者総合職業センター障害者支援部門）

1. はじめに

基本的な社会技能に課題を有する障害者（知的・精神・高次脳機能等）については、事業所、家庭、福祉施設等における具体的支援や、ハローワークや地域障害者職業センターを中心とした相互の連携が重要である。ここでは、特に障害者の家族を支援する上で、家族のアセスメント（構造と機能）を整理し、家族の負荷や本人と家族との関係を明らかにして、家族が本人の支援者になることの難しさに関する研究の到達点に言及する。

2. 問題の所在

家族を障害者の支援者の一人としていくため、特別研究8「事業主、家族との連携による職業リハビリテーション技法に関する総合的研究」において、脳外傷の家族の方や学習障害の親の会、自閉症・発達支援センターの職員に対してヒアリングを実施した。そのヒアリングを実施するうちに様々な家族が浮き彫りになり、本人を支援できる状態にない家族の問題も視野に入れなければならないことが分ってきた。

そのため、そもそも家族が支援者になりうる要件は何であろうかという家族アセスメント（家族の構造と機能）の課題が浮かび上がってきた。

さらに、高次脳機能障害者とその家族については、トータルパッケージを使って、職業リハビリテーション計画が上手く進むという綱川¹⁴⁾の典型的な事例もあるが、その他の障害特性に応じた家族支援についても考慮する必要が出てきた。

3. 目的

家族を職業自立を目指した支援者にすることも踏まえ、家族の構造と機能をどのようにアセスメントして、家族を支援するか。家族と障害者本人、外部（関係支援機関等）との関係を明らかにして、どのような家族であれば、どのような支援者になれるか、家族を支援者にするということが難しい場合も踏まえて、課題を明らかにしていく。

4. 方法

家族支援に関する文献（家族の機能、障害者支援等）に基づいて、家族の構造（何が）と機能（どうなっているか）という視点でアセスメント方法を考えた。さらに、障害特性別の家族支援の課題や配慮事項についてもまとめた。

5. 結果

（1）家族の構造（何が）

イ 家族構成

家族構成をアセスメントするツールとしては、次に述べる家族構成図（ジェノグラム、エコマップ）があり、ヒアリングや観察によって把握することが考えられる。

（イ）ジェノグラム（世代間関係図）

ジェノグラムを用いることで、沢山の情報を即座に伝えうるため、家族事例研究等でよく用いられている。核家族と夫婦両方の3世代の拡大家族の歴史を手に入れて図式化することが目的である。障害者と家族の関係が、親子の場合と夫婦の場合では関りの仕方や自立の仕方が違っている。

また、社会経済的な相違も家族に影響している。

近年離婚や再婚の家庭が増え、家庭の再構成が課題にもなっている。別居か単身赴任か、片親家族か混合家族か等の構成を把握し、家族が障害者をどの程度支えられるか、支援者が家族にどのような支援をしていけばよいかの手がかりとなる。

（ロ）エコマップ（生態地図）

エコマップは、ハートマンによって開発されたもので、人や家族のソーシャル・ネットワークを構成する人や機関や集団などを書き込み、その関係性の質やエネルギーの方向などを表す図である（野中⁷⁾）。家族を支援するネットワーク作りのための方策である。大雑把には、ジェノグラムに環境要因（社会資源）を加えて図式化したものと言えよう。支援者が家族との協同作業でエコマップを作ることにより、家族と環境との相互作用がどうなっているかを把握

し、家族の資源（リソース）と長所やサポート資源（支援機関等）を明確にする。例えば、住宅のある地域によっても、支援を受けられる社会資源も変わってくる。家族自らが、サポート資源をより有効に利用する手立てを考えることに役立つ。

ロ 家族構造の四つのサブシステム

ミニューチンの考えに基づく家族構造を成り立たせている四つのサブシステムをローズマリーら⁹⁾による障害等特別なニーズを持つ子供への支援の観点から説明する。

①夫婦（両親）サブシステム

夫婦生活の満足度が高いほど、子どもの特別なニーズに上手に対応し、適応していける。

②親子サブシステム

・養育機能：子どもの障害を十分親として受容できているか。

・訓練機能：両親の間に訓練の方針について一致した考えがあるか。

③同胞（子ども）サブシステム

兄弟姉妹は、障害を持った本人をよりよく理解しており、肯定的な関係か。

田澤¹²⁾によれば、親は障害を持っていない兄姉に我慢させがちとのことである。

④家族外サブシステム

家族は、外部の関係支援機関等から適切に支援を受けられているか（外部から孤立したり、専門家に完全に依存したりしていないか）。

さらに、支援者が家族に介入するのに先立ち、夫婦サブシステムと子どもサブシステムの世代間境界は明確になっているか、親密な「同盟」関係なのか排他的な「連合」関係になっているのか区別して捉えたり、パワーの側面から家族構造をアセスメントする（上別府⁵⁾）。

ハ 家族のライフサイクル

岡堂⁸⁾による家族の発達6段階の枠組みに沿って、ローズマリーら⁹⁾の「子どもに障害があると診断された家族ライフサイクル」という視点から述べていきたい。

第一段階：新婚期、第二段階：出産・育児期、第三段階：子どもが学童期の時期、第四段階：子どもが10代（青少年）の時期となっているが、就労支援に関することは次の段階からである。

第五段階：子どもが巣立つ時期；第1子が家を出て、社会的に自立した時から、末っ子が巣立つまでの時期である。就労等の支援がメインになる時期であり、この段階で特に重要なことは、家庭の外での社会化のさまざまな機会を持つことである。

第六段階：加齢と配偶者の死の時期；自分史・家

族史の統合、親子関係の再規定等が課題となる。健常児であれば巣立っている時期だが、障害を持つ人にとっては、家族や関係支援機関のサポートを受けながらの自立ということが望まれる状態であることが多い。白石¹⁰⁾によれば、精神障害者の親亡き後については、家族は経済的なことを心配しがちであるが、実際には単身生活を送る時には女性より男性の方が困っていることが多く、特に食事作りや整理整頓・掃除等の方が金銭管理よりも困っている傾向がある。このような場合、トータルパッケージホームワーク版での食器洗いや包丁使い、洗濯物畳み等の練習は役立つかもしれない。

（2） 家族の機能（どうなっているか）

イ 家族の親密度（きずな）と方針決定（かじとり・パワー）の2つの視点

家族機能を把握する方法として、色々な家族療法等の支援方法を調べたところ、「家族の親密度合・関与の仕方（きずな）」と「家族の調整・方針決定（かじとり・パワー）」の2つの視点を把握していることが多かった。いずれも、バランスがとれた中庸な状態がうまく機能していると思われており、極端な状態でうまく機能できていないと考えている。ここでは、オルソンらの円環モデルを代表として紹介したい。

オルソンらは、家族の行動に二つの側面、凝集性（きずな）と順応性（かじとり）が根本的に重要なものと考え、この二つを組み合わせる家族システムの円環モデルを発表した（立木¹¹⁾）。

凝集性（家族のきずな）とは、家族成員相互の情緒的結合の大きさのことである。凝集度が極めて高い状態から極めて低い状態までを次の4段階にまとめている。てんめん（ベッタリ）、結合（ピッタリ）、分離（サラリ）、遊離（バラバラ）である。

順応（適応）性（家族のかじとり）とは、家族が変化を容認する程度、平衡を維持しようとする程度のことであり、権力構造（リーダーシップ）や役割関係から考えられる。順応度が極めて高い状態から極めて低い状態までを次の4段階にまとめている。混沌（てんやわんや）、柔軟、構造化（キッチリ）、硬直（融通なし）である。

アセスメント・ツールとしては、オルソンの家族凝集性順応性測定尺度（FACES：Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale）によって数量的に把握することができるが、日本では立木¹¹⁾による改訂版である FACESKG（FACES at Kwansei Gakuin）が開発されている。

また、亀口⁴⁾による家族イメージ法を使うと、家族の構成員個人がどのような家族イメージ（メンバ

一の間のつながり、パワー等)を持っているか視覚的に把握しやすい。

ロ 家族の「くつろぎ機能」と「しつけ機能」

「くつろぎ機能」と「しつけ機能」が柔軟に行われているかをヒアリング等で確かめることが必要である。

村瀬⁹⁾によれば、「家族」に期待される機能、あるいは健康な家族の持つ特性について考えてみると、家族は矛盾した二面性を担うべく期待されている。その一つは、「教育的機能(しつけ)」対「憩い、甘えの場(くつろぎ)」ということである。このような二面性を統合的に生きるということで、家族生活というのはなかなかむずかしく、これにかかわる治療者には二面性を統合的にバランス感覚を持って生きる素質が求められるとのことである。

ハ 家族の障害受容の程度

先天性障害の場合、家族は期待していた健康な子供を失ったという対象喪失の受容過程を辿ることが多いと考えられるが、中途障害である高次脳機能障害や精神障害も受障後に類似した障害受容過程を辿ることが多いようだ。特に見えにくい障害の高次脳機能障害者の場合、家族がトータルパッケージホームワーク版を実施することで、障害の理解が進んだりすることもある(位上ら²⁾)。

二 家族のサポート体制

渡辺¹⁵⁾によれば、家族には、①障害者の状態を常に把握して合併症の早期発見や健康維持に努める観察者としての機能、②障害者の心身の状態に応じて医療機関・福祉機関等に相談して交渉する管理者としての機能、③障害者の身体的ケアや情緒的サポートを行う介護者としての機能、という3つの機能が求められるという。

ホ 家族状況の把握

最も大切な、保護者・本人の支援に対する動機付けが明確になっているか等はヒアリングや観察で捉えるべきであろう。次に状況を把握しておくべき項目を述べる。

- ・家族役割:社会的な役割から犬の散歩の役割など、障害を持つことによる役割変更や負担度にどの程度各自が耐えられる等。
- ・家族間の交流パターン(支援者も含め)を見て、考察する。
- ・家族の訓練の意思決定などでリーダーシップを取っているメンバーは誰か。家族支援における主協力は誰か等を把握することも大切である。
- ・家族内では弱者が強者になることもある(調子を崩したり、病気になってしまった者の意向が最優先されることもある)。

また、精神的に疲労困憊していないかを数量的に把握するには、ぜんかれん編集委員会¹⁶⁾「生活困難度チェック表」が有益と考える。

(3) 障害特性別の家族支援

次に、障害特性別に家族支援を行う上で配慮することについて述べる。

イ 知的障害

知的障害児に対しては、早期発見・早期療育が援助の中心であり、母親にのみ多大な負担を課すものになりがちであった。知的障害児の療育や相談は圧倒的に母親に負担がかかってしまうが、支援者はあくまでも夫婦サブシステムを視野に入れておかなければならない(早樫ら¹⁾)。

ロ 精神障害

中途障害であり、人の障害認識、家族の障害状況を認識した上での支援が必要である。しかし、高EE(Expressed Emotion: 批判的、敵意、情緒的巻き込まれの感情表出)の家族は再発しやすいということもあり、特に精神障害への知識が家族に必要であり、家族への心理教育や家族教室が不可欠である。

ハ 高次脳機能障害

中途障害であるため、本人の障害認識、家族の障害理解の状況を認識した上での支援が必要である。トータルパッケージを使用することで、障害の理解が進み、メモリーノート等の補完手段を使うことで職業自立に進むことができた綱川¹⁴⁾の事例がある。

二 身体障害等

身体障害の子どもの家族は、凝集性が強すぎて、過保護・本人のプライバシーが軽視されがちになることもある。身体障害のある子どもを持つ家族では、家族の境界がてんめん状態を示し(ローズマリーら⁹⁾)、思春期には脱家族を主張することがある(土屋¹³⁾)。

6. 考察

障害者の親や様々な支援者の考えを概観すると、家族を職業自立の支援者にしようという考え方自体が、すでに職業リハビリテーション専門職としての立場に偏った考え方とも言える。

海津³⁾は、障害者の親の立場から「人は誰も訓練するためにうまれてきてはいない」、「現在を生きて楽しむ積み重ねがあつて初めて、将来に繋がっていく、ともかくひたすら訓練・訓練という時代ではなくなったというのは事実だと思います」と述べている。とかく、親(特に母親)に幼少期から専門家に家庭での課題を出され、親の罪責感から取り組んでいるという状況も考えなくてはならない。

親が我が子のために目的を持って是非やりたい

と納得の上で、障害児（者）の意思も尊重し、課題を選択すればストレスも少ないと考える。

大雑把に、家族を職業自立に向けた支援者にしようとする場合、次の4パターンが考えられる。

①家族が課題を実施する中心的な支援者になれる

家族、障害者本人とも目的を持って是非やりたいと考えていることに加え、家族の構造・機能等のアセスメントから、家族に負担がかかりすぎず、ゆとりを持って実施できる状態にあることが考えられる。

②関係機関が課題を実施することのサポートを家族が行う

家族、障害者本人とも目的を持って是非やりたいと考えていることに加え、家族の構造・機能等のアセスメントから、家族が直接指導することが、家族及び本人の負担としてかなり大きくなってしまふことが考えられる場合である。実際には、規則正しい起床就寝・食生活・健康管理等の生活支援で精一杯の家庭がかなり多いのではないかと推測する。

③家で課題をこなすような状況が整っていない

家族、障害者本人の片方が目的を持って是非やりたいと考えているが、片方は納得できていない場合である。また、精神障害者の家庭で高 EE となっている状態の家庭や、家族の疲労度がかかり高くレスパイト（親の休息のため一時的に障害者を預かる）・サービスが必要な家庭が相当する。身体障害者で家族関係がてんめん状態になっており、家族からの介入が自立とプライバシーを侵害していると本人が考えているような場合もある。

このような家族では課題をこなすことがむしろマイナスに働く可能性があると考ええる。このような家庭も比較的多いのではないかと考えられる。

④家族関係で深刻な問題がある。

家族・本人とも目的を持って是非やりたいと考えてはいない。それどころか、親のしつけの仕方が過剰で虐待の状態になってしまっていたり、精神障害者の家庭で高 EE となっているだけではなく、家庭内暴力が常態化している等が考えられる。場合によっては、親と障害児（者）が離れて生活することが望ましいこともありうると考えられる。就労等を目指しての支援というより、家族の医療的・福祉的な支援が中心となる家族と考えられる。

7. おわりに

支援者は、家族がどのような状態かをアセスメントして、適切に支援していくことが大切だと考えられる。6 考察の①②の家庭については、家族が障害者の職業自立の支援者になりうる状態であり、トータルパッケージホームワーク版を利用した場合効果

が上がる可能性があると考ええる。また、家族の状態は大きくライフ・サイクルで動いているだけではなく、家族の病気・事故等による入院や祖父母の介護等の変化があり、常に変動しているという視点でアセスメントすることが大切である。

<参考文献>

- 1) 早樫一男他：知的発達障害の家族援助,金剛出版(2002)
- 2) 位上典子他：地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について;第13回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集,障害者職業総合センター(2005)
- 3) 海津敦子：発達の遅れのある子の親になる,日本評論社(2002)
- 4) 亀口憲治：家族臨床心理学 ～子どもの問題を家族で解決する, pp142-146,東京大学出版(2000)
- 5) 上別府圭子：第11章領域と研究法③家族,齋藤高雅編,臨床心理学研究法持論,pp148-168,放送大学教育振興会(2006)
- 6) 村瀬嘉代子：子どもと家族への援助 ～ 心理療法の実践と応用,金剛出版(1997)
- 7) 野中猛：ケアマネジメント実践のコツ,筒井書房(2001)
- 8) 岡堂哲雄：家族心理学講義,pp101-102,金子書房(1991)
- 9) ローズマリー・ラムビー他：教育カウンセリングと家族システムズ,現代書林(2002)
- 10) 白石弘巳：家族のための統合失調症入門,p240-243,河出書房新社(2005)
- 11) 立木茂雄：家族システムの理論的・実証的検証ー円環モデル妥当性の検討(1999)
- 12) 田澤あけみ：障害児福祉・家族援助のあり方,pp64-65,一橋出版(1996)
- 13) 土屋葉：障害者家族を生きる,勁草書房(2002)
- 14) 綱川香代子：高次脳機能障害を有する者の就業のための家族支援のあり方に関する研究,pp23-76,障害者職業総合センター調査研究報告書 No.58(2004)
- 15) 渡辺俊之・本田哲三編集：リハビリテーション患者の心理とケア,医学書院(2000)
- 16) ぜんかれん編集委員会：ぜんかれん家族講座4～家族がいきいきしなくっちゃ,p49,全国精神障害者家族会連合(2000)